



日用心法鈔

下

9
1503
3



口口
1305
3

日刑心法鈔卷之下

文選子曰舜帝野死也世人の舜といふ天子の日夜憂る

如死する追勸免むの漢土帝一の聖王といふれん人の

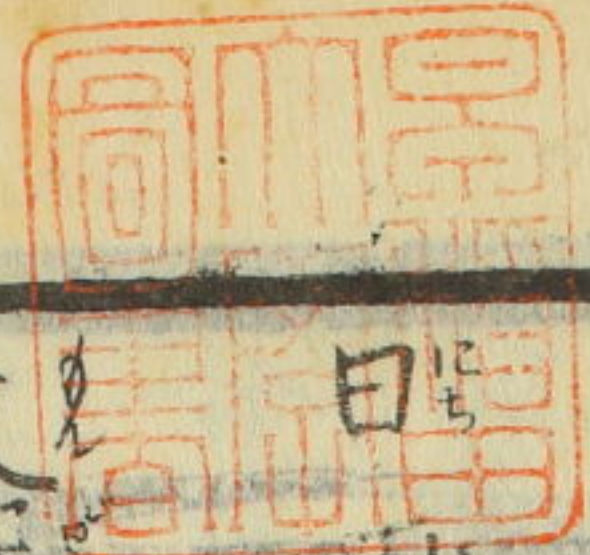
如況や其余の人はいふるを答の半也又禹王の三十六年

天下は経曆とて股子毛也内めて子啼ども家も入る況水

をおさ免むの孔子の曰禹王あうせむの象とあんと

のあうらん也大聖人方さく疾をひはして勸めあふ

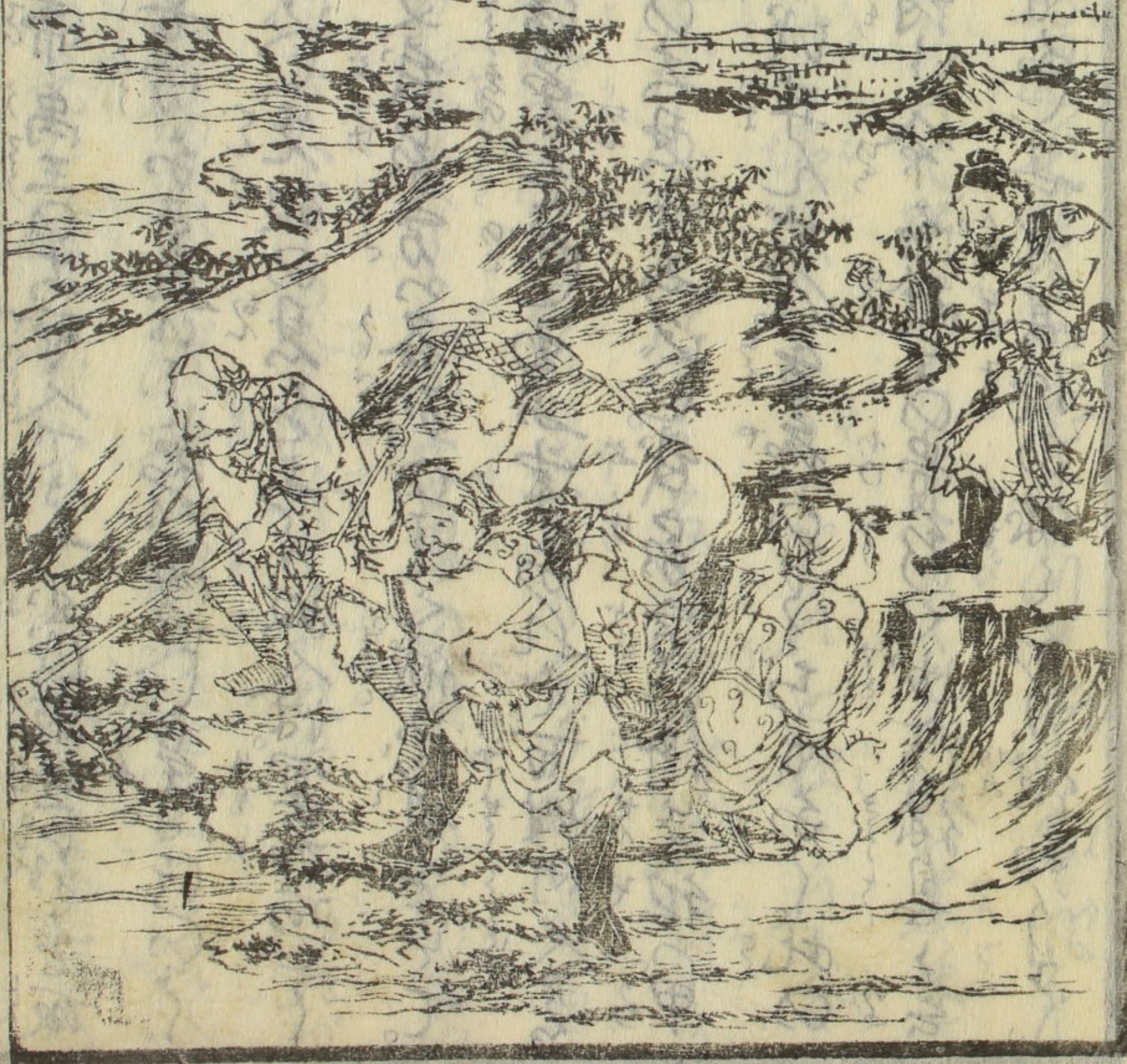
況や女智を終の人何ぞ勸免ぞんぬれ情んではとあ



日刑心法鈔

二

唐の禹王の天子の
 御身が三十二年
 天下を巡りて腹を
 毛の内にし子啼
 けり家まのく木
 とおこめて一すれ際
 けり大聖人がまの
 如く況や愚痴毎能共
 何ぞてんをさるん
 特んで勤む



日明の法世下



日明の法世下

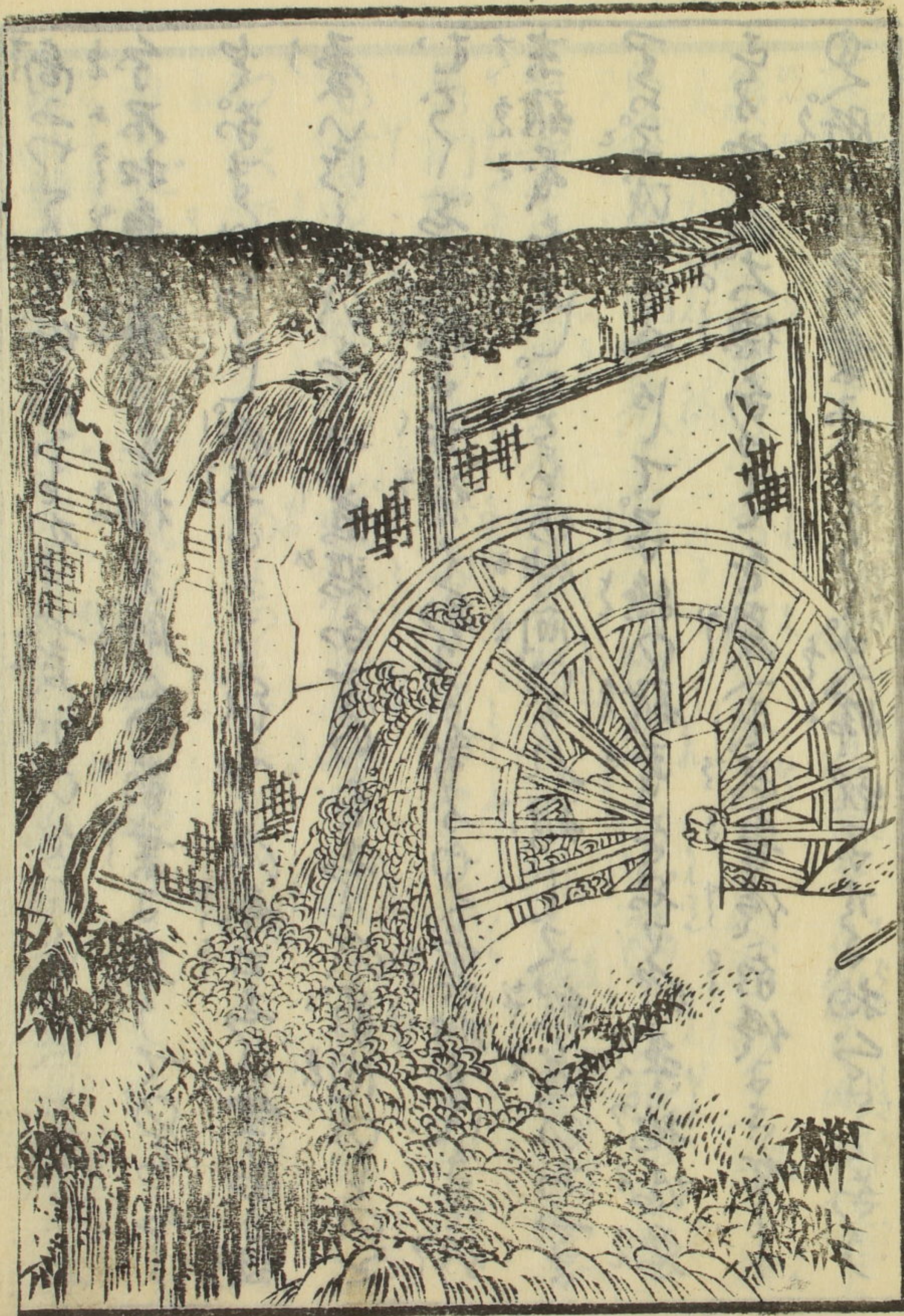
あつた物をいれ貴氏打ての。いそといふ所の。新の。新母友人
 友極あつて。百姓何人の先祖といふもの。先祖にあらぬ
 あり況や。自家方の。清先祖よ。於ておや。是より。下。清先
 祖方の。清君を。あひ。急。又。大。切。お。思。れ。致。す。願。い。甚。思。れ
 致。す。とい。ふ。お。松。の。お。ご。ら。ま。を。な。ら。ぶ。子。玉。以。治。免。家。を。無
 万。氏。以。安。ん。ど。ら。ま。お。り。是。を。よ。く。あ。ら。じ。附。合。の。由。に。也。
 ○清先祖より。ち。死。さ。せて。高。枕。と。あり。今。清。家。と。い。ひ
 清。の。知。初。を。あ。つ。つ。う。け。て。吾。輩。と。お。ら。ぶ。高。枕。あ。つ
 は。お。淋。と。い。ふ。さ。げ。い。は。先。祖。の。恩。を。あ。ひ。甚。身。以。り。あ。く

きて。下。民。を。あ。り。れ。下。の。新。母。あ。つ。ぬ。や。ら。に。い。は。れ。ば
 是。新。子。た。る。人。の。職。分。あ。つ。是。以。身。を。備。免。家。を。と。も。の
 玉。を。治。つ。と。い。ふ。且。又。清。先。祖。方。の。清。君。提。を。い。の。り。致。身。を
 後。生。を。致。し。む。お。願。い。清。先。祖。の。恩。を。あ。ひ。つ。の。り。致。身
 の。清。君。を。祿。が。ふ。人。は。わ。き。の。り。さ。人。の。あ。ら。ま。の。り。あ。の
 志。あ。つ。人。は。今。世。の。福。壽。を。増。未。来。の。收。樂。を。求。む。は。る。と
 百姓何人を是より。先祖の恩を。あ。ひ。つ。の。り。致。身。を。と。も。の
 玉。白。川。源。定。信。の。玉。が。輪。は。り。と。天。自。ら。民。を。治。つ。と
 あり。故。り。天子。を。あ。つ。是。を。治。免。あ。つ。天子。と。い。ふ。

治の半ありては。故に諸侯を立て是以治免む。法度
邦内を治る。則ち天子の命ありて是天子の命ざるあり。
是より以て治る。職は天子の職にして治る。民も天子の民も其
其徳。絀りて天職ふんじらる。わらざるはあり。雖も。吾に私
智以用ひて。天民を虐げ。天職以空しくせむ。則ち其人を
廢して。又更に徳を有る人ありて廢し。孟子より。天
の廢するあり。必ず非討が若し者ことあり。
夏の桀王殷の紂王共其國を
其天職を祀て。一人に必し徳を備ふるあり。
人あり。天子孫よりして。昏愚昏りて。則ち其國の
了こと愚の智のあり

いづれの法先祖の法を守らば。天の廢するあり。あ
む。是又先祖の徳にふして。徳體守成の君といふものあり。
文王侯たる者。私の王あり。皆天の土あり。私の城あり。皆
天の城あり。私の民あり。皆天の民あり。我はむしめぬ。あら
むに。あむを乃教に況や。祖先の徳にふして。一國を保ち。万
民の上あり。とあれど。善く敬んて。其を其に。以
治る。是より。祖先の恩報あり。嗚呼。諸侯たる人。是を
あむて。是より。廢し。已。上より。天子の下。万民の
あむる。や。意を以て。万民を裁断し。万民を

日月の表す



おぼあへ見へての油取は世縁を後へ安し。若くは
見ゆる。強むらむら。何や。桑林を野上へ。大
人の飛車の如く。は。車。の。下。の。や。り。横。は。は。り。ん。子
供の時より。敬ま。て。後。は。て。あ。り。て。彼。を。考。へ
て。向。き。か。さ。ん。と。赤。子。を。ん。ら。を。さ。か。し。て。並。び
あ。る。母。親。の。身。は。あ。て。子。供。の。あ。り。て。ま。る。も。の。こ
じ。か。さ。ん。と。あ。り。の。お。ね。ん。が。ら。の。半。を。鼻。が。や。ら
せ。い。は。た。向。め。の。お。竹。え。ん。お。福。と。い。ひ。ま。した。じ
お。つ。さ。ん。と。い。う。て。い。は。た。ま。ま。考。へ。今。は。焼。た。の。ま。ら。あ

餅の代物だのといひます。しほげに。あ。て。も。稀。免。舟。で。魚。に。一
取。り。と。あ。り。ん。は。是。の。ま。あ。の。子。は。悪。女。と。さ。ら。ん。ど。何。れ
成人の後。を。あ。て。る。や。に。と。て。お。ぐ。屋。し。是。親。たる。者
の。道。の。先。祖。の。身。に。あ。り。か。り
世の中を。後。り。て。今。は。あ。る。阿。波。の。鳴。戸。は。た。川。波。も。あ
る。祖。律。先。生。は。義。け。熱。心。の。か。く。博。学。多。才。あ。る。こ。し。世。に。あ
る。あ。り。世。の。の。ら。の。学。ぶ。た。あ。り。あ。て。志。や。ら。ん。流。て。居。て。ら
世の中。の。海。り。あ。り。考。へ。世。上。を。あ。ら。と。ら。と。海。り。ら。ん。く
幾。万。人。の。も。ま。す。れ。其。人。で。あ。り。た。を。愛。い。は。し。る。も。毎。人

世の中を後りて

世

おまの状子休

うい

家ま

老の後に
今浮情

大方のちやの

おまのちよる休の

とて



難一多の万苦の切を積て後子とてきりきりありあけの
 鳴戸の六の世の仲成波風あけ海らんあかん葉和と
 守一とて危角人を先なたて人を難波の河一とあふあを
 いかんあて海りあがらんはらんかて改改被せ一か
 味あて身の為よとど
 眠の第よしく醜と美あげき暑る暑る悲しん中地り
 貴ににきき見てる居てすてらんかんの如くあかん
 あいば何をさるらんあもさあげらんあまあま
 是るも改ちりてお位子安んト我家業を知情せんこれ

君子の道は道に在りて
愛中同善なりて世の業を以て
業の苦を以て飢寒の苦を以て
を苦とせしめられたる痛む
有し及至縁と味の大至樂を得たり
を樂む也人樂むる日あり
樂む故樂むる苦むる
ありて樂むる
出方影なりて世神の勅り
世の苦むる

を樂むる其樂に
ありて樂むる
世の中は秋のふりに
世の中は苦のありて
苦むるを樂むる
に及びあらば何半の樂
安んじ一生を安樂に
世の中は苦むる
ありて樂むる
ありて樂むる
ありて樂むる

すなはて一々終るなまあり。説の如く終るまで切徳以得る
 庵(若石位心ありて勤免終るごんむ。未未の扱を其得也
 子まで飢渴の地獄へ落一家一門は追苦痛をうけ終るまで
 半人々存知の通り一々家徳大の神の教くは似せ。家業出
 情をへる銀米銭を以て莊嚴する極樂より後者よく
 親いんごくをさくひあふ庵。罪利生ひ下子至て志
 人の世を返る。皆是終るの家業。家徳大の神の心ちく
 あれば招目とあふ。大切は信んごんむ。世の人に世の人
 多くいふ家徳大の神を麻林の庵招目とあふ。油ひ

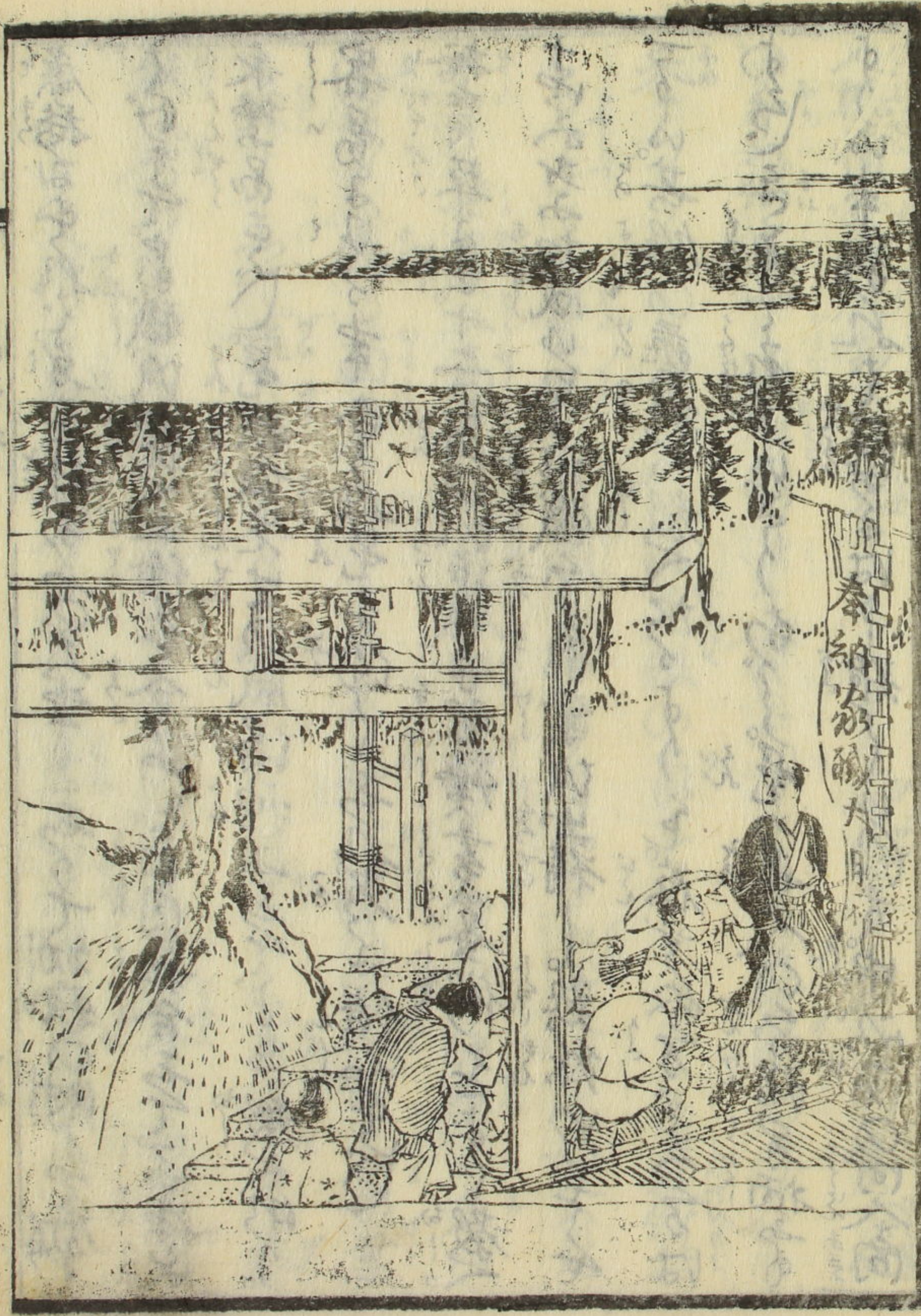
家業に酒色花鳥奢る名守利欲情勝負半の悪業あり
 道がまよくは見られ終る身をその家おもて。世に終る
 信むとあふ。折人の家徳とあふ。人たる者ら家業を
 号し導る。愛しあられむが家徳。親は子は意を奪ふ
 教くは。終るが家徳。兄弟は愛ひ。愛むが家業。丈夫を
 終る。正法を以て妻をすく。教むが家業。家業。家業。人を
 大切は終る。お後をさく。が家業あり。子の身を捨て親に教
 ひ。安心するが家業。妻の丈夫は随ひ。おとあ。あ。あ
 見え守侮の心あり。貞を守。が家業。身は兄弟は実

の親れやうに敬ひ願ふら家業之朋友のあはれを以て交ふ
 悪友方へんをよめず時交はさけ合のが家業之士は侍
 たるの道をたぐひ。百姓の百姓たるの農耕以ては家業
 あり。職人の其職分は出情。商人の其商ひは油取あり。
 種を出さず家業之士農工高た各々家業大の神を大
 切に侍心志す。振目ありれば家内和合い。子孫長久に目
 及世を後るあれ。人々備あり難く存たてまつて世
 大の神は只一層。大切は侍心志す。ある人が面白くも
 又むすい半をり奉るもの。振目もあらず。い神は一身

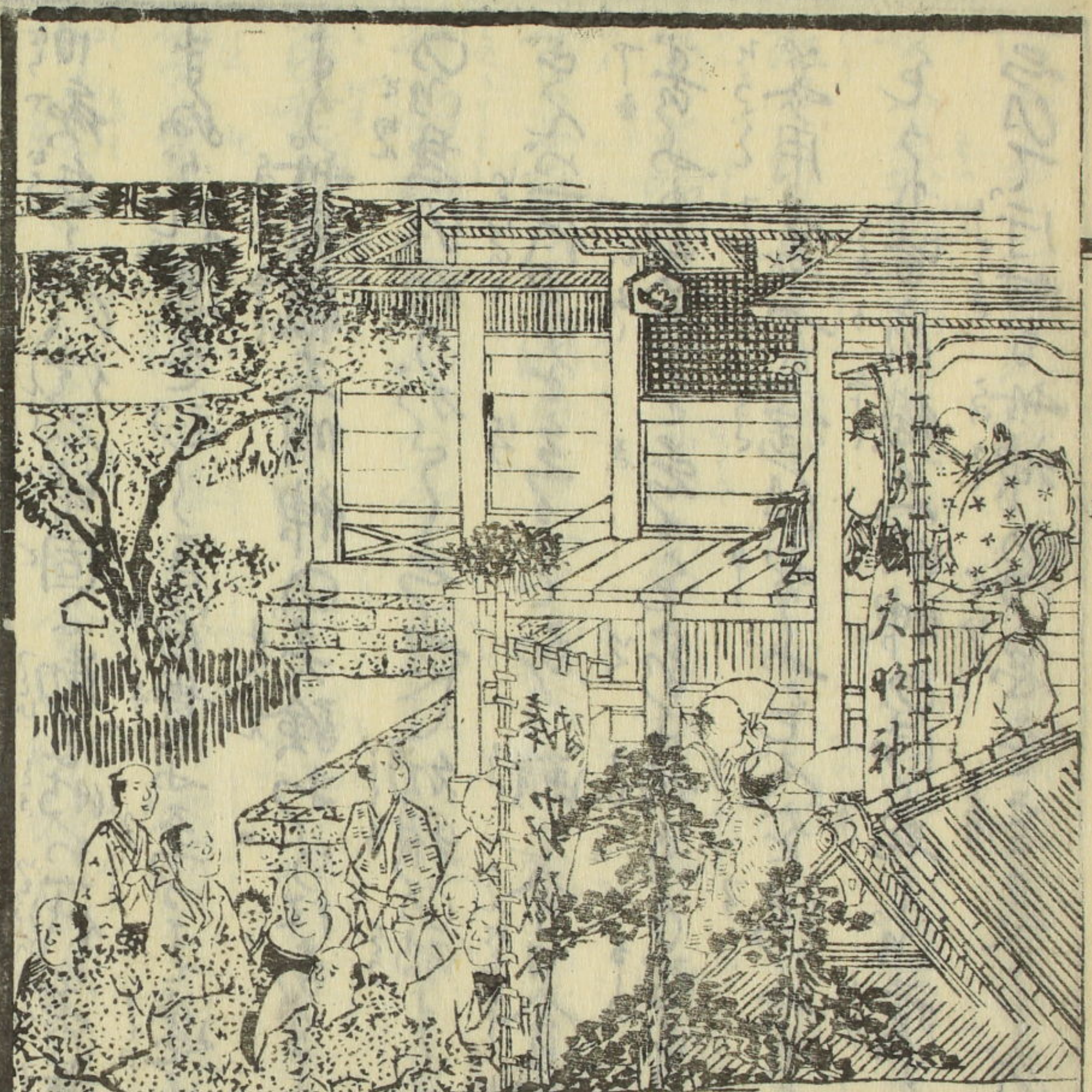
をおのせ。不礼に家業以勤めて怠るは。いづれいづれある事
 微運の者も。悪しうして。敬ひおとす。家業大の神
 を兼累子とせらる。ある福高運の者。たゞ其美あり。
 且目前に其徳ある。大の神を一日兼累子とせれば。一日はけ
 の美之。一月兼累子とせらる。一月はけの美以て。あり。
 一月兼略子とせらる。一日はけの美。奉りて。換は。一代の美以て。あり。
 あり。又一日家業大の神を大切し勤れを。忽ち一日も福
 分を得る。子とせらる。又一月大切は侍心志す。勤れば。月はけ
 の福分を得る。て。敬ひ。は。けて。一代大切は兼累あり。

して先ある大福以得て子孫を保て安樂な世を後と
 世に盡強わつたあ神佛多しといふもけ家職大明神の
 取つけ利生わつたあて大切なるべ大切なる神に福
 分を授ける半速あり又兼累すすまふ兼累すす神に
 會ふあるとわゆるあて成ふ世に思ふ交生神と申す
 家職大明神の業に思ひ信じて日々怠るべ信じて
 家業を大切とすべ但し神神をわたりあつたあ
 賢素の造酒以捧げ正意の燈明をたもて思ふ辛抱の
 御鏡を備へ家内和合の御神樂以わづら清浄にして

日夜怠るべ信じて固く勤むべ一代善苦困窮の大難
 まぬぐえ運をわづら富貴に至ると速くあれを初難
 する家職大明神の具強わつたあてを熟知し神
 の思ひわづらあて初難の時より神の業に志す
 びんご一代身をまゐるとあり難し今日會半をまゐる身を
 兼累の衣服をまゐるも兼累の儀も手習するも積物するも
 兼用兼累の儀ひあつたあて人を使ふも存るも起るも何
 もくの皆家職大明神の法也心陰あれがあけあ
 ちて行時神の思ひをまゐるべ道にまゐるべ



奉納の御大



家職大明神の御推の時
 一人は信作も三人おちには三依
 ぐいしと不信作のるるとま
 くこんささるる肩にび
 はあさるるあとりやとひ
 さねがらぬから利生荒
 神さまよまよひとさ
 があ

子孫をあらはに基ひあれども、藝術以て學び、
あつて、文音一語、
をせて、

○此の藝は、
○性相を、
○夫ら、
人間一、
ど、
に、

達せ、
人、
根、
を、
氏、
備、
や、
抄、
あ、

神皇正統記

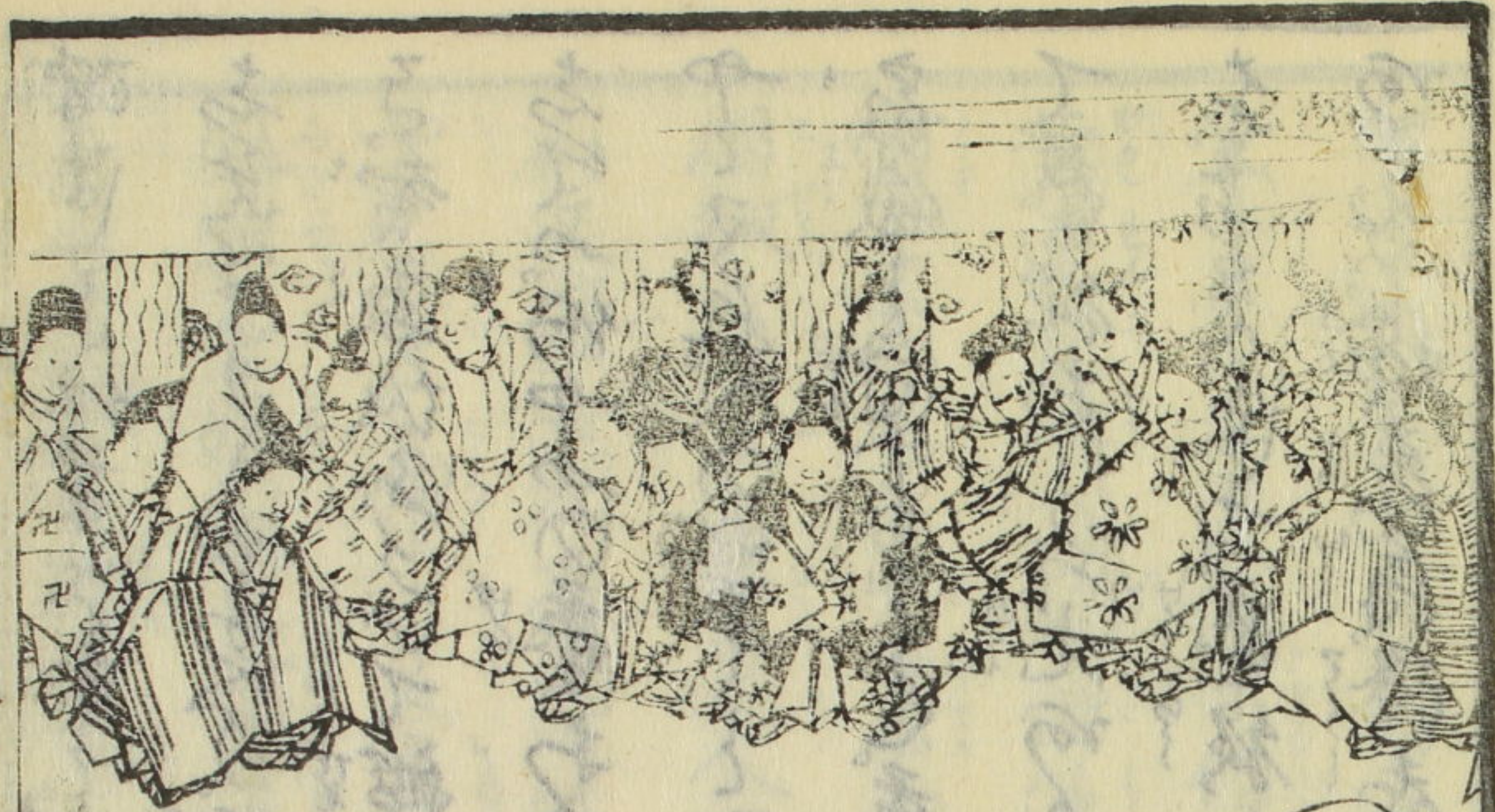
卷

半はおく家業の障りのあり合宿を多く費して此の
 の破滅とあつた。まじくはあつた。あつた。あつた。あつた。
 て用ひ多くとあつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
 ○旅先のくせよ人なり。あつた。あつた。あつた。あつた。
 ○あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
 ○あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
 世分の通りにお遠慮。あつた。あつた。あつた。あつた。
 大いあつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
 かん。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。

を破る。眷属は路路子送る。あつた。あつた。あつた。あつた。
 何分家業を大切にして。あつた。あつた。あつた。あつた。
 家業の身治して。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
 て下とれ。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
 骨はあつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
 扱又安ん。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
 目もあつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
 半のあつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。

嫁の持参物。是れ諸屋へ寄り至る迄悉く批判をいれ方半
 不足の念を起し是れ御守の始とありて嫁の仕業。月角以
 ちつやうにあり又月角の届ヶ物迄。彼是のやうにありは
 万般くも嫁の里より至る迄諸屋へ届ヶ物迄。陸子念以
 けれカをいれてて成るものをも世方に彼是と不足はあ
 は先方の志しは。あつぬより起すこと。先方の身あ成る
 る。又ちやうやくとも。世方へあま業ひたる嫁。あれは。是
 のあれ。揃へてそつた。何ぞ。先様へ不足をいふと有
 成る。考く。又女房の夫の候ありと。きを急ゆ。あま。振

兼へ男たる身。の。だ。あ。む。成。さ。し。女。の。悪。う。あ。る。者。な。れ。は。悪
 妻。あ。ら。ひ。ひ。き。う。せ。し。く。あ。ら。ま。の。ん。れ。通。り。あ。ら。し。早。竟
 女。の。お。し。ゆ。う。う。ご。ら。の。夫。の。お。し。ゆ。か。う。ご。ら。と。女。房。の。悪。妻。は
 夫。の。恥。あり。女。房。を。あ。や。る。半。の。お。身。の。候。成。さ。る。も。う。と。ん
 安。か。う。し。又。女。房。の。お。の。内。を。移。す。と。あ。れ。は。諸。半。大。切。の。物。毎
 ち。お。や。り。下。女。迄。は。の。終。り。の。し。き。う。せ。始。末。成。身。の。志。す。ゆ。え
 半。の。は。り。あ。ら。や。ら。ん。ぐ。く。成。り。下。女。小。者。迄。女。房。を
 仕。方。を。見。て。す。く。も。何。く。と。あ。る。者。と。終。り。の。物。毎。て。半。以
 あり。又。舅。姑。を。始。先。夫。を。大。切。さ。う。や。す。し。べ。り。思。て

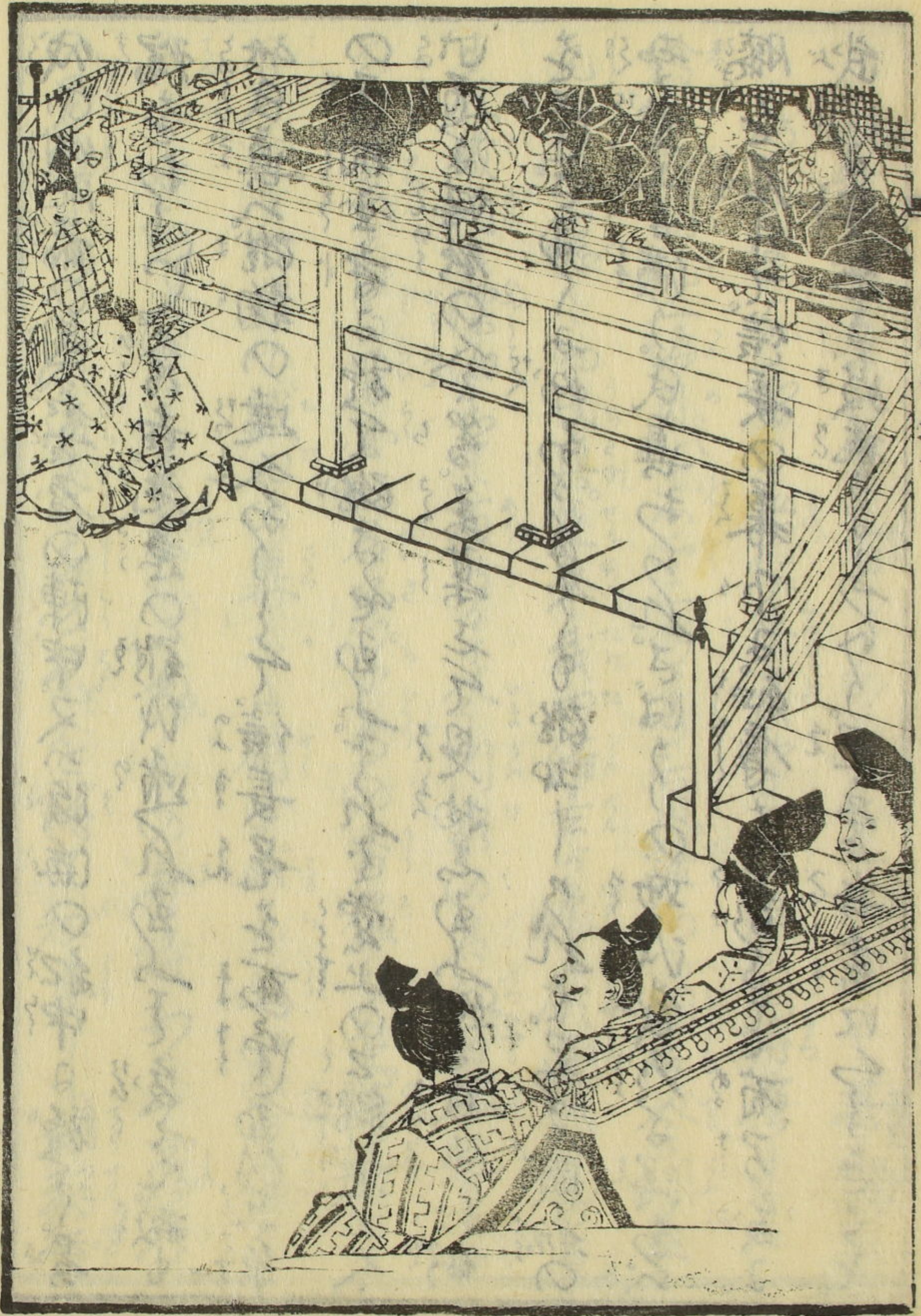


今川義元

今川義元イマガワノヨシノブの男ヲ
上総ウツノグサ今氏イマノウヂ真京マキョウ都相ツクシ国寺クニジ
おぬオノすスとト職シヨクのノ所シヨ



七



今川義元

八



爲すの所要之猶委交半の四書國字毎大學の初をえて
 志すしを變り化脱としどもの。修身正意の介也其備を
 正言としつゝをを尋ぬれど家業は疎く志すべ成統
 かに依て第一家職を出情して修身正意以て守
 ありて是太師の志すは守りて疏考の道を得たる
 心得ざるは守りて守らざるを。宗門帳をのた
 宿ありと定免者ぐ一

○世の中に思ふ者ありあはれたる家柄は漏のたる兼と備錢
 ○一代の守りたるは守ぬれど守人との子版と計あり

○世の中を治るるは善くして善くあり。徳と名をたしあんでおけ
 世に首の家業はむらむらよきる故ふ家柄も漏り。版も
 計りたぐられぬ。新坊をよめてありて善くするあり
 半のあり後子。終く忠業して志すべし。是見のあり。

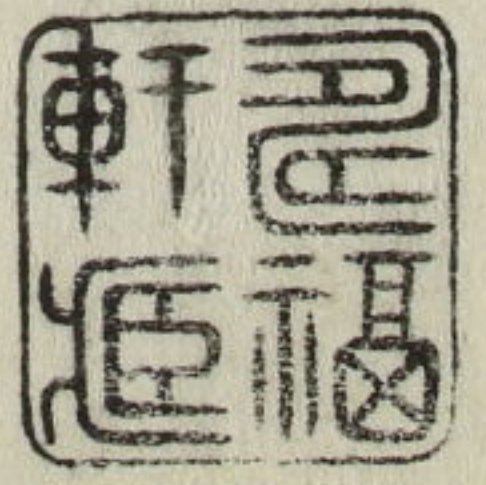
世の穠穡艱難の半ありて入用ありとも。阿まうと名をた
 愛するは心。後編を待て。是の秘く密くあり。必だるる
 漁。先見追の。二度の上度を心す。あされ。篤とは
 の。世に治るる。日く月く入用の。とも志す。知る。ざんた
 おどく。心。故。あ。と。見。す。

和漢の昔より賢人の教くを見ゆれたらつとあり政
むるふものありてお人はま人も世は善きとつら
やふあれつと然らふより暫者蚊蛇を恐るる
の朝のびくつ身ぶるもさもの思ひ人ふせよ

文政十三年正月

東都下谷金相

壽福軒述



日用心法鈔卷之下大尾

周子儒佛神二道の語

古賢のいつく若人今する言成候せえん何を以て
尚末の福田を成せんたつと去り作り作えを以て
今奉豊饒は日成る多しといふもの今今の豊饒は
已て明今の為ふ耕作せえんは儉死せん半穀ひは言
候せざる人も又かくの如し私子云 妻の家業を大切
しし妻あらば後生を形ひ手前くの帰候法を
一節子修むべし是現世後生は取舎りぬ智者あり
又後生はあまもの形は子ありぬといふ人ありまら

愚者あどし既し現世あり未來ありてありぬ道はあり
 深く考へて後生は縁がひりぬしむさぶらうをよすうて
 ありぬ吉人未來ありしり人成徳ありあり
 天地の理おせらるるをわらぬものあり何れもまじはるる
 命もあらんおあらしめて見よ天くわうて比てとある
 聖人の言ぬとあり是の世は縁と名するのらありおと
 類して念仏のよぬ縁がすく世の縁も縁ふたあり
 書もその智慧の宝の身は縁が念仏のよぬ死の縁連
 世立そのお考へむし若未來あり比縁ありば罪はく

晴しりる縁もや人あり家来あり家来しれ毀し
 りるもや社会のよきあり悪あり社会のよきあり
 換しりる縁もや丈夫して天くり分あり思ふは徳む
 吾思ふよは去の業因よしりて今生の身をたすておれ
 は天のお怖る人をも恨むは身を怖る人一方は
 たる業の報は縁しりては是未來あるははしり或人の
 りる縁者達のしりるは佛の鏡の方彼ありて実し罪人
 有らせぬ地獄極樂をよりらんとは性も縁く教くは
 らるをたすうそをのそく又神通しりる業ありあは

佛法をせむる人。仁義の道に極むる人の人交りのあるぬ
やらの遠のあつて。所代りの天子將軍を討てて免。
歴々の智徳ある人々の尊敬しむるをすてのあつて。
丈夫佛法のつゝぬもの。地獄極楽のあつてのこと。白
あつて。先敵山宮野山城大和の寺。諸家の名山。京都
にすて。土師。増し寺をさし。免十八檀林國々の寺。末寺。
何十万の大寺をさす。し。ち。さ。く。傍者律及者の家
を建。造。し。以。て。勝。手。次。子。あ。つ。て。免。れ。存。せ。ぬ
半。之。嗚。呼。あ。つ。て。佛法の破滅は是非のあつてなれども。ま

あつて。天子將軍を始。免。歴。々の所方。く。御。信。作。持。ら。さ。れ
は。以。不。念。し。つ。あ。つ。て。御。先。祖。所。代。り。方。の。法。律。半。の。執。行
仕。換。し。つ。あ。つ。て。免。れ。存。せ。ぬ。御。廟。而。も。つ。ぬ。通。理。も。成。り
免。れ。存。せ。ぬ。大。儒。達。は。お。後。わ。り。て。公。の。さ。ら。び。と。あ
あ。つ。て。免。れ。存。せ。ぬ。邪。い。是。非。の。あ。つ。て。な。れ。ども。あ。つ
あ。つ。て。免。れ。存。せ。ぬ。苦。人。を。送。り。つ。つ。あ。つ。て。免。れ。存。せ。ぬ。毒。子。万。あり
大。罪。と。い。つ。て。免。れ。存。せ。ぬ。
又。燒。が。灰。と。あ。つ。て。免。れ。存。せ。ぬ。と。い。つ。て。免。れ。存。せ。ぬ。
み。見。つ。て。免。れ。存。せ。ぬ。を。論。じ。て。甚。お。後。び。あ。つ。て。免。れ。存。せ。ぬ。と。い。つ。て。免。れ。存。せ。ぬ。

何れものわれ人習ふ何れ故にありたることかよれ難
し或は地獄極楽のありし何れ故にありたることかよれ難
皆して人を迷ふを悪言あり。あつちあり虫の故にあり
地子居る虫が出て蟬とあり。川子居る虫が蜻蛉とあり。其
か死んで身てるんじ土にも居るものあり。其魂あるを
をまじり。其か愛人の縁人あり。愛人のもの人あり。
魂の上も下もあり。智慧のある者あり。又ある人あり
すくはばいさく人あり。口のさけぬ人あり。瘡あり。聾あり
夢の音悪あり。方半は身てユ丈夫あり。若天よを来て

天の降るもの皆一極の人して皆一極の苦樂を出でた故あり
て昔も万方ある如何の故あり。形あり。先儒も君子もその
見ざる前を信む。又屋漏みの恥ぢ。又如左のあり。この類
わけてうごかじ。又誠の一字。又仁義礼智信の終は字あり
をまじり。積善の解きも何れ理あり。天より来て天
より解きも解きもいさく。まはして。聖結は虚
説とあり。聖人は虚説は皆実人実結あり。信
びて。む。皆福徳を得る者あり。余道をし
らんとて己まが道追けがと大悪といふ。

古路のいづく。神儒二道の中あり。上学の人ハ佛法に
 中學の人ハ徒セバ侍レド。下學の人ハ唯侍レの事ト云
 を以テスル時ハ佛法を侍レ神儒ありバ小神儒ト云
 蓋シ初學の徒書をよまんト歎シテ儒門ヲ入ル人ハ此
 彼の朱子が弊風ヲ棄テて自家試ムル由シ儒書ハ
 よむト云ハ余及を侍レ其ラヨク知ルベク
 ヤ余道を侍レより先余及をよクあざむくものも
 侍レものハお道もあらぬものハ必ズ朱子が寂滅
 眞をこころとしよふだれを移アテしあうれ朱子は

儒子委交志テ佛法ヲ誅シ男之佛法をよめぬ人のいふ
 を笑テ考クもセズ用ウハ一ハ虚をよクテ万ハ実を侍
 ろの得りあざむくものハ時極極極とあざむく
 らざるてハ侍レんよりお身をくへ見テの實學ハ
 いふまじし是を學ブ入をよるといふ
 明通僧於一紙法語の語まじく。汝が耳の穴ハ誰レ
 ヤ汝が髪髻ハ誰レが裁たるヤ。汝が眉の毛ハ誰レ
 ガ剃身の色ハ誰レの裁縫のヤ。汝が身の上ハ誰レ
 何を以テ地獄極樂をよらんヤ。嗚呼至愚のれ佛法此理

は概て自れのことくしゆのちれぬ。是は未来の徳也。

三才毎疑はる。聖人の世を教て却て未来に救ひ佛の

未未を憂て今世にさしむる。世道は遠く

是は佛で佛を以て教者。佛の法は万世に

大徳とて。佛の徳は佛の徳。佛の徳は佛の徳。

佛の徳は佛の徳。佛の徳は佛の徳。佛の徳は佛の徳。

佛の徳は佛の徳。佛の徳は佛の徳。佛の徳は佛の徳。

佛の徳は佛の徳。佛の徳は佛の徳。佛の徳は佛の徳。

佛の徳は佛の徳。佛の徳は佛の徳。佛の徳は佛の徳。

佛の徳は佛の徳。佛の徳は佛の徳。佛の徳は佛の徳。

佛の徳は佛の徳。佛の徳は佛の徳。佛の徳は佛の徳。

佛の徳は佛の徳。佛の徳は佛の徳。佛の徳は佛の徳。

佛の徳は佛の徳。佛の徳は佛の徳。佛の徳は佛の徳。

佛の徳は佛の徳。佛の徳は佛の徳。佛の徳は佛の徳。

佛の徳は佛の徳。佛の徳は佛の徳。佛の徳は佛の徳。

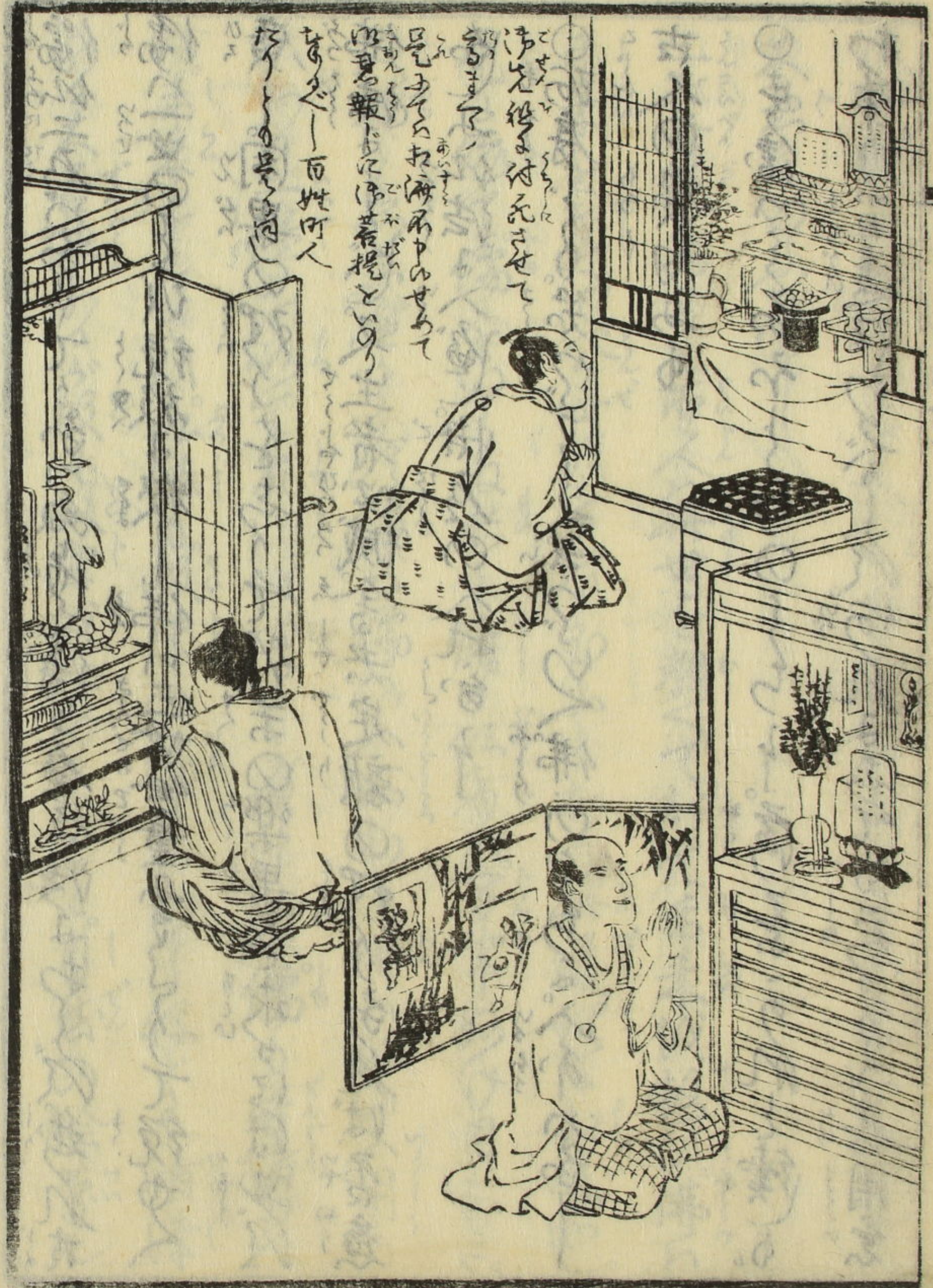
佛の徳は佛の徳。佛の徳は佛の徳。佛の徳は佛の徳。

佛の徳は佛の徳。佛の徳は佛の徳。佛の徳は佛の徳。

有て我ど〇せられて死るありたり世あきて釈迦の連片
 毛絲その志あしゆといふあてのまゝ志だじ魂ひ毛
 消ど未未のあるかゝ。急交後生此絲がひあど小儒者
 小神乃者のいあてをゆいゆあてゆい彼等の儒仏神の
 道の真偽を養あめあぬ者た人をはたかろくまを物
 裡すりの思ろあ眉は當をほけて用心まじ
 大目ない大とく吉の君子國は志て福徳香満の土地なり
 世の中此宝といふの五穀あり世より令銀珠玉の宝の資一
 と食れど。実の米穀は過たる宝は令銀珠玉の五穀

日用のまじり

四十一



是れ先づお海あやめあて
 此君報に伊若提といひ
 ちよと一百姓所人
 たりとのまじり

日用のまじり

四十一

道あり故に兼学すべし兼学する時に理を以て三教一致

あり世に然るは

○神佛又天通と名をうけて唯何のあきふおどりの

八幡大菩薩の神縁なり

○慈悲佛心垂ふ神まぐる人回さる候哉こゝろはけり

世ありてよく悟りし神儒仏一致あり神ありとの佛

ありとの儒ありとの佛ありとの佛ありとの佛ありとの佛

通しとてせぬ人の道を以て傳ふべくて三教各々

極くの若法く時ありて大入用目前の理を以て知れ

たること若し道の内なる色もぬといふ人は智の人と

いふべし一致を以て別あり別を以て一致の奥儀

を以て儒と入世の入用佛は後世の入用神は現世後世

世ありてありてありてありてありてありてありてありて

得るの及ぶことのみ以て考へて考へて考へて考へて

○えてのあれお身の爲に兼学すこと此の室をうやまへる人

兵書よりよく井を掘て濁を去るに如く神を傳へて

たる人を救ふが如く神ありて濁の水をあてると

しどの若し井ありて濁の水をあてると濁の水をあてると

蓮是現世安極後世極樂の極あり其種の中ても南無
阿弥陀仏が最上あり是は續く若法也末世の凡夫念仏は
よきまゝに現世後生の猜利得がかるべし古徳のうゝ
○稱んがゆゑのち成のべし其難をよけて後世成に
すかるべしといふ有難さ念佛あり是を急度ゆす也
あきんど是ハ阿字十方三世仏弥字一切諸菩薩陀字八方
諸聖賢皆是阿弥陀仏といふ念仏あり其心を古徳の
念ふ○一まふ三世の念れ名成る先て唱ふる度は唱へぬは
あし又あふ○佛不さるおまゝの徳を一口に南無阿弥陀

仏と唱へれば一さし稱念にても念仏の四徳のさしはまじり
をよくまじり稱阿字十方三世仏のころ平昔覺悟ま言秘
密經のあ終り出たりといふ無礙引導集のりたり也と去
大菩薩松譽巖的和尚の翻経用悟集のまじりれば徳て
あはれ又弘法大師の佛よき年續波の必菩提通ちあり
は南無阿弥陀仏と去又字は書其上の字は阿字十方三
佛弥字一切諸菩薩陀字八方諸聖賢皆是阿弥陀仏徳
徳の字をいれて弥陀名其の大切徳をいれむ御徳
弘法大師一切經をえりて徳と唱へて唯むる阿弥陀此字

一切の諸仏の四徳一切の菩薩の四徳一切の諸佛の四徳一切の諸
阿彌陀の三字は綱目して淨依仏淨依法淨依僧の三淨
戒あり是則ち仏法僧の三寶也。わづらひ法の四徳阿彌
の三字は綱目して淨依仏淨依法淨依僧の三淨
あり。容易のてまわづらひ南無阿彌陀仏を唱ふる者は
三世十方一切の仏法の四徳は一口のくんで極樂淨土の
あり。この妙法は是よりして淨自身も亦く入る。淨は
○實海がんの内は咲花の彌陀よりある。ある人もあしと又
○極樂をんのもよむれば南無阿彌陀仏の口はぞあり

けつと此二その法ありてよくある。此事尾州八事山締忍
律師淨観親あり。彈指普上人繪詞傳のまはる。たりん有ん
人の世本をぞし。此をて念仏の有か。ことをとる。是の
弘法大師あり。まはる。天台大師も止観の二の巻は若人
彌陀の名号は唱ふる。則ち十方仏を唱ふる。四徳といひし
きあり。但淨陀を以て。法門の五とをとの五なり。甚る
永劫の智覺禪師。傳教大師。慈覺大師。惠心僧正。隆亮法
師。淨慈律師。法完律師等。わけてかどく難し。皆是仏法
中の大衆大龍あり。あるは皆彌陀のたが念仏よりなり。

況や其の僧俗の皆念仏よするべし善の王も衆の王も

十方諸仏多りれど かく亦た形ありし

是ぞ火定を出さりて 宝蓋ありし車あり

又珠璣寶冠始免じ 三唱龍樹を天親も

南岳天台永明も 皆是淨土を期す

況や亦善が悪あり いくも形ありぬ

智者いよく形あり 悪者いよく形あり

況や見して大徳方の念仏を唱へおされぬ衆はよく

あはれ又教家の

元祖大師の百善の名作の名字の御書子師恒沙の切徳は

口輪の一紙も傳ると作られたり又佛の念仏を善士大徳

兩岸の宝号としかる是よすなり

聖神の御んで念佛を唱へるは私をたる世のいそぐら志を申

ふて毎日の万遍の御日課は勤免る其徳授け増上も一山

を始免十八の御書ありて十八檀林を御建立はたされ

其かの寺の教をあらうかた其大寺一寺ありて御建立

は容易の事なり其御書一の御書といひたるる

聖神の御徳をあらわさるるに後せざらんとの念仏
あり是れ唱へて天下泰平を祈り後世極楽を成就
世念仏を中を考へ良運長久淨子孫繁昌あり。又世
念仏は中々ぬ人は来世の地獄に世
聖神へ祈りて世念仏の中すべしとの
事ありと作せられたる。皆く世念及びの通あり。その
おの時の世念を考へて作せ出されたり。おれは世念の中
ぬ人の世念 聖神の御徳をあらわさるるに後せざらんとの念
地獄ありと又世念の中を人へ世念の安穩来世のありと

極楽にせし是を現世安穩後世極楽の念仏といふ。世念
は極上人の世念○後の世の世念といふ。おれは世念の中
すべしとの念仏を考へて世念の中すべしとの念仏を考へて
すけぬとの念仏は現世の利益ありと志す。世念の中
を考へて世念の中すべしとの念仏を考へて世念の中
下民は何事かぞと世念の中すべしとの念仏を考へて
世念の中すべしとの念仏を考へて世念の中すべしとの念
おれは世念の中すべしとの念仏を考へて世念の中すべし
戒造罪の考へ成仏を志す。世念の中すべしとの念仏を考へて

元祖上人の御家

○罪とりの業とくして皆消る。南無あまの仏のあまに下はる
空也上人の御家

一度も南無あまの佛とくして人の運れよものぢあぬあ
空也上人の御家

ん子あまの御家とくしてはるあまの御家とくしてはるあまの御家
世家を考て易行易終の以念仏といふ業は終るまで
神儒仙の二道は極くの善法あり。あまの已まら偏頗は以て
餘道を蔑んずは侍る。二道は子侍る。法はあまの御家とくしてはるあまの御家

一てもあまの御家とくしてはるあまの御家とくしてはるあまの御家
極樂を搦くしてぢあまの御家とくしてはるあまの御家
了簡あり。何の爲にぢあまの御家とくしてはるあまの御家
をく人らして考る虚言偽り。或はいふは或は又法王。二界は極
善何ぞ人を欺く。玉りんや仏はたは玉りんやあまの御家
をたまたまあり。大悪大悪人といふは。仏の無欲清淨大慈
悲の御心をあまの御家とくしてはるあまの御家
人を解を搦といふは。大悪大悪人。お遠は佛悪人は虚言
偽り。あまの御家とくしてはるあまの御家

姓名目だも志くく志てぢぢををたまふらん。行後心は
 云ふんあしおのれが邪心は引當て佛智人の御心以討
 何ぞ志くくらんや。あつの人れつてしつて文子耳はのり
 金くく流人の福徳を換して。未永劫の苦果はあ
 けふおとろし悪人あり。世惑ひを毎せんが為は愚昧
 忘れて長音を贅を君子の人添削志て。こぞくくし
 智恵の悪音をとくくひごて下悪の人を苦道く
 導くあり

南無阿弥陀仏くくく

日用心法鈔初編	三冊	主従心得草初篇	二冊
同	二編 三冊	同	二篇 二冊
同	三編 三冊	同	三篇 二冊
同	四編 近刻	同	四篇 二冊
		同	五篇 二冊

以上八部十九冊皆出板

東都書林

淺草新寺町

和泉屋庄治郎

